

## 第一分科会「移住定住」

### 第2部

それでは、16時10分となりましたので、これより第一分科会「移住定住」第2部を始めさせていただきます。ご登壇されている方々をご紹介します。皆様から向かって右側より、事例発表団体、岡山県真庭市長、太田昇(おた のぼる)様でございます。お隣り、兵庫県養父市長、広瀬栄(ひろせ さかえ)様でございます。そして今回、コーディネーターを務めていただくのは弘前大学大学院地域社会研究科教授 平井太郎(ひらい たろう)様でございます。

ここで、平井様のプロフィールを簡単にご紹介させていただきます。平井様は、東京大学大学院総合文化研究科博士課程を修了し、独立行政法人日本学術振興会特別研究員、弘前大学大学院地域社会研究科准教授を経て、2021年から現職に就任されております。専門は社会学、特に地域における合意形成の実践的な研究を志しておられます。総務省地域力創造アドバイザー・地域おこし協力隊アドバイザー、新たな農村政策の在り方検討会などの委員を歴任されております。これより先の進行役は、引き続き平井様にお願いしたいと存じます。平井様、どうぞよろしくお願いたします。

弘前大学大学院地域社会研究科教授

平井 太郎 先生

改めまして平井です、よろしくお願いたします。これから1時間ちょっと、移住定住をテーマにした分科会の第2部ということで、第1部の方で最初お話しさせていただいたものをかいつまんでお話しさせていただくと、移住定住という風にして大都市部から地方に人の流れを作りたい、これは大きな総務省を始めとして国の施策であります、例えば地域おこし協力隊1つ取っても、募集しても全然人が集まりませんという市町村もあれば、もう今日も浜田の前半に、これはちょっと協力隊ではないですけども特定地域づくり事業協同組合のスタッフとして募集しますといった時に、もう2倍以上の形でちゃんと応募が来る。こういう風な差が生まれているという状況です。

ではどういう風なところが違いがあるのかなというところで、前半十日町の関口市長から十日町でなぜ協力隊が集まり、そして定住しているのかということで3つポイントを挙げてくださいました。1つが十日町で25年にわたり実施されている大地の芸術祭というもの。2つ目が焦らずきちんと人材を見極める

というマッチングのプロセスを大事にしていること。そして3番目に中間支援の方たちを置くことで、協力隊として受け入れた方たちの働き方、稼ぎ方、そのところまで伴走しながら支援をしていく体制が整っているということでした。

これを今日の第一部、第二部の流れでいきますと、大地の芸術祭ということをやれというわけではなく、やはりそこで大事なものはアートとか、スポーツも広く言えばそうかもしれません。あるいは知識とか、そういったものからもう1回地域をちょっと鏡を照らし直していただいて、そこで地域に入ってきていただく新しい入口をきちんと作る。そしてそれを一過性のイベントにせず、四半世紀にわたって粘り強く続ける。こういう風な入口が大事で、それに今若い人たちが響くということで十日町のお話、それから浜田のお話を聞いていただいたかと思えます。

2番目のポイントにあったマッチング、そして3番目の中間支援、伴走支援というところの核になるのが、この地方だからこそこういう稼ぎ方がある、経済の回し方があるというところで、入口の部分としてのアートとかスポーツ、出口の部分としてはそれは何なのかといった時に、この第二部のテーマで養父の市長さんとそれから真庭の市長さんからお話を頂戴できるのかなと思っております。

養父のお話としては、今日非常にコンパクトな資料しか事前にいただいているのですが、やはり中山間地の農業というものに新しい価値を与えようとする国家戦略特区の取組というものを軸にご紹介いただけることになっております。

そして真庭の市長様からは、真庭市でSDGs未来杜市ということで脱炭素、SDGsに向けて、もう本当に豊かな森林資源を活かしきるという取組、そしてそれによって経済を回していく。このお話を協力隊の取組と合わせてしていただけることになっております。

私の方からの前振りは以上とさせていただきます、まず早速養父市の広瀬市長から「やぶ 2050～居空間構想～実現に向けた養父市の挑戦」ということでお話を頂戴します。広瀬市長、どうぞよろしく願いいたします。